

歌合

建保四年八月廿六日

皇朝書畫印

海山先生

詩集

卷之四

雜詩

行吟

為康先

詩集

海山先生

詩集

海山先生

詩集

卷之四

雜詩

行吟

信實

詩集

海山先生

詩集

海山先生

海山先生

海山先生

詩集

卷之四

歌合 建保四年八月廿二日當座

題

朝紅葉

夕栲衣

深山霧

霧中意

海邊意

仍者

左

女房

實氏卿

賴範卿

經通卿

保季朝長

經言朝長

家宣朝長

經無

資隆

右

家衛卿

兵衛内侍

雅清朝長

知家朝長

範基朝長

範宗朝長

行能

信實

友康光

庇儀判

匿名如恒

一



一皮切葉

左勝

女房

横巻の的をなれり山のたのころおましく秋風とく

右

兵衛内侍

夕のすくしつゆ多りたりとくり京志所やうらる舞草

左勝

二皮

左巧

實氏

物あつちのあまをくく秋あつちるえをよま

右

これぬれうせの山乃りりえよ物あつちるうらる舞草

三皮

左巧

経通

夕のすくしつゆ多りたりとくり京志所やうらる舞草

右

家衛

あひのすくしつゆ多りたりとくり京志所やうらる舞草

あひのすくしつゆ多りたりとくり京志所やうらる舞草

四皮

左巧

頼範

秋の夕のすくしつゆ多りたりとくり京志所やうらる舞草

雅清

本の上

明日新子も豊のしつゝ見送るゝがあはれきりなり

七中敷

左 拵

保季子

文のききし、流からぬ白きいねにて新日かすもあは

右

行徳

龍田山時多とらふふとよとらあはれきり流は流は

拵

六中敷

右 拵

彦三

三島に流るゝのしつゝ新子の流るゝの流るゝ秋を

右

知家

案内とあはれ新子の流るゝのしつゝ秋のしる

たた昔を捨るゝ仍り拵

七中敷

右 拵

家直

まゆしはる拵り秋はあはれとらふとあはれとらふ

右

信實

足りせも流るゝが、新子の流るゝのしつゝあはれきり

たた昔を捨るゝ仍り拵

八中敷

右

経急

十二支

左

経通

選らるる言々よりとち此下ノ言凡しつもそそりておふらる

右 勝

康光

夕日下ノ言入ノ序され候に秋下ノ言入ノ衣入ノ言

左 勝

十二支

左

頼範

夕日下ノ言入ノ序され候に秋下ノ言入ノ衣入ノ言

右 勝

家衡

夕日下ノ言入ノ序され候に秋下ノ言入ノ衣入ノ言

左 言は是古款に似たり勝

十二支

右 勝

條季

あき山けの言入ノ序され候に秋下ノ言入ノ衣入ノ言

右 勝

信実

あき山けの言入ノ序され候に秋下ノ言入ノ衣入ノ言

右 勝

十二支

右 勝

経通

あき山けの言入ノ序され候に秋下ノ言入ノ衣入ノ言

右 勝

雅清

夕風の吹くは日せしきうらむつりく衣ふりて
左極志く大司過告仍い太わ勝

十六叟

左 指

家宣

遠道は堪へてことしうのQも昔の志く秋の夕をせ

太

範基

秋風乃神子夜しきいづの月の約れとる衣ふる

左 教きぬさもるあく、善ありくくわ太又

夕は、いもく、くさく、りとりわ指

十七叟

左 経急

夕風の吹くは日せしきうらむつりく衣ふる

太 勝

範基

夕風の吹くは日せしきうらむつりく衣ふる

太 勝

十八叟

資隆

志つぬ、麻乃衣ふる今、ふし、くれぬ、う、く、ん

太 勝

知茂

志つぬ、麻乃衣ふる今、ふし、くれぬ、う、く、ん

左 志つぬ、麻乃衣ふる今、ふし、くれぬ、う、く、ん

十九叟 深山務

左時

女房

栞乃丹（まき）の文（ふみ）なるらる栞はふの夕（ゆふ）ぬれ也

右

家衡

芳（よし）く（し）のち（よ）る麻（あし）の（た）ほ（と）る（お）り（よ）る

左時乃（ゆ）つ（り）切（り）わ時

右時

左時

實氏

み（ら）ら（う）ら（ら）の（は）め（り）を（お）り（ら）る（ま）り（て）け 杖乃（た）ん（げ）人

右

知秋

小（こ）勢（せ）の（ま）り（ひ）つ（は）る（さ）る（た）り（さ）る（ま）り（の）心（こ）せ

左時乃（ゆ）つ（り）切（り）わ時

廿二支

左時

徑通

い（は）ら（い）る（ひ）も（と）ん（し）ほ（こ）ろ（さ）る（ま）り（の）心（こ）せ

右

紀定

ゆ（は）ら（い）る（ひ）も（と）ん（し）ほ（こ）ろ（さ）る（ま）り（の）心（こ）せ

左時乃（ゆ）つ（り）切（り）わ時

廿二支

左時

札範

衣（え）の（さ）ら（い）る（ひ）も（と）ん（し）ほ（こ）ろ（さ）る（ま）り（の）心（こ）せ

右

範基

あ（さ）ら（い）る（ひ）も（と）ん（し）ほ（こ）ろ（さ）る（ま）り（の）心（こ）せ

左云此云正體左弁子人の中山不審流致宛
廿三史 カニ史

左 坊 保季

考ゆる足跡やゆとくし麻ハれとの道にそやとよこす

康光

はまぢくのひりくまをねなうし旁よめくはる月け

左大昔母坊雅そり所

廿四史

左 坊 経子

多うゆよふてくるくなくまはたまの坊ろりウキ方乃す

廿一史 左 坊 行徳

尺ケいのやまきしひりまはしるるもとれぬ袖の杖より

廿五史 左大昔母坊

廿六史

左 坊 家宣

ふたことあはれし海きりウキ方よらりくるしととさ

廿七史 左 坊 雅清

まきだのあふとくせちうとふきしきりウキ方よらり

廿八史 左 坊 雅清

廿九史

左 坊 経子

よひのふらしよまらウキ方よ麻の着るよをほくろり

大

音内内侍

此の事は... 大

左大右左

廿七

左

資

此の事は... 大

大勝

信實

此の事は... 大

廿八

左

女房

此の事は... 大

此の事は... 大

大

音内内侍

此の事は... 大

左大右左

廿九

左

水

此の事は... 大

大

竹

此の事は... 大

此の事は... 大

可

左 太刀斗 勝子 ぬり 持
廿四 史

左 経 巻

少いあまを心け公とてき浦のいさむれ松入奉とありける

右 晴 飛 宗

正う神よ志れぬのね^杜なうめ運公よえたて所いどめり付

右 太刀斗 優 ありとてり 勝

廿五 史

左 晴 資 隆

を花むきさうひあ右方なるうひはあまら神のそし露

右 飛 巻

あひれ松やそあそまりのいづく地とあうふるあこいよ

右 太刀斗 憂 ひまのいづく地とあうそりり勝

廿六 史

左 家 宣

東路乃志乃ふりあのせ保るるあこいづく地とあう末のね山

右 晴 花 巻

玉がと花乃ふりあゆみ舟り松あとうるあ全つく杖のまいつ

左 太刀斗 マリく 志く 右 太刀斗 兼 兼とてり 勝

廿七 史 伊 遠 志

左 坊 女 房

信^はふりもあやうら煙とたとうせはいぬのい

八幡宮の御宇

右 元宗
平らやまきの浦は月とて夜ぬらぬの足と神の跡

左 大共を揚るりそみ晴

廿八夜

左 坊 實久氏

折祢くくえは浦の千世同くすれぬ地のあさうは

右 康光

とりまゝあまぬりしは我がやんまきまらんとく

左 大若心御優よるる 何れ坊

廿九夜

左 坊 経通

庵ぬまし神あまひひかといぬをさしあまぬら

右 多満内侍

あるせよ我しりくさはぬ千多ぬらまきしはのうけ

左 大共為幸よ及もぬ坊

三十夜

左 保季

か多ゆりくぬはとれ救るてあはのよ火まきこころ

右 新唐

赤鳥ららぬとて出で侍勢をる極ひのくハ川

左 大共をまひあり仍り坊

卅十夜

とくかたん
とくかたん
とくかたん

右 龍宗

平らやまの浦は日くし後ぬらぬらと神を祀りて
左 大共を括るりてあり

廿八番

左 折 實氏

折 祿くくく之浦の子に同子にぬぬ地のあさきと
右 康光

とりまきあまのりし我しやんまきまのり
右 大共の御優よるるゆり

廿九番

右 折 経通

尾ぬまに神を祀りしゆりといゆをいづらぬらぬら
右 多内侍

あさきよ我しゆきぬら千多ゆきゆのりゆり
右 大共の御優よるるゆり

三十番

左 保季

ゆきゆりしゆらにぬらぬらてあゆのりゆきゆり
右 折 康

右 折 康

あさきゆらぬらぬらてあゆのりゆきゆり
右 大共の御優よるるゆり

卅一番

四十一 左 指

経急

ふせんまひりけりいん^け信^け下^けめ^けあ^けは^けり^けか^け火

右 太

信実入

世は乃あすのく縄くくあまきととた^けを^けあ^けき

左 右 太 右 太 右 太 右 太 右 太

四十二 変

左 太

家宣

わらあよあつと信^け分^けり^けと^けあ^けき^け信^けい^け五^け持^け

右 太

知家

を^かの^かつ^かあ^かり^かと^かり^かは^かま^かと^かも^かれ^かは^かり^かの^かと^かは^かり^か

右 太 右 太 右 太 右 太 右 太

四十三 変

左 指

資隆

あちひ^けに^けま^けく^けえ^けと^けあ^けき^けあ^けき^けあ^けき^け

右 太

範基

と^えと^え多^えく^え信^えよ^えう^えき^えの^えあ^えま^えけ^えり^えの^えあ^えま^えけ^えり^え

右 太 右 太 右 太 右 太 右 太

四十四 変

右 太

経三

あ^けき^けと^けれ^けま^けり^けま^けれ^けあ^けき^けあ^けき^けあ^けき^け

右 太

行能

と^けあ^けき^けあ^けき^けあ^けき^けあ^けき^けあ^けき^けあ^けき^け

齊合 建保元年八月廿日高座

題

夕暮苑

古寺月

寒山序

齊多直

寄石直

寄友思

作者

左

女房

徑高初長

家宣初長

行張

信實入

次員隆

友康光

右

家衛初長

雅清初長

保季初長

知前初長

範基初長

範宗初長

考周内侍

二時

海師

知家初長

衆儀判

匠名以恒

一 虫クモク

左 勝

女房

乃由のるう渡りくつ凡そ女は子々此は條乃とて

右

皇内侍

旅人共月る好む女師花あは家ちる秋のゆふら

左 大昔誰と梅誰た方の志と白くち梅うへも何

二 虫

左 勝

経高

香深紫やうもやうく吹風ちりゆくおき秋を白の花

右

家郷

たを春の春杯をうくやううらん多歌歌を萩の記せり

三 虫

た身共刻首尾石叶ゆ左は勝心もい

右 勝

家宣

心せよ夕雲とそき女良花をたぬ風よりあひまにせ

左

靴巻

言ぬとあはるお月此よ若う風ありしうら女良花

右 左 右 左 右 左 右 左 右 左

四 虫

右 勝

行能

ク冬れ公もあまうらうらん萩ふく風ハふるうら

左

保季

あしふん

言のりたるはたのいおを吹風のさひくしきとて

左方取有 其意仍乃勝

信實

ありきいおを吹風とたれのをとて工秋風と吹

夕雲乃曇はきよのしり衣花乃まんと神よりん

左方取有 其意仍乃勝

資隆

まきしりふらふのたはるまきしりふらふのた

十七

雅清

夕雲乃曇はきよのしり衣花にまんとて秋風

七

左

康光

あつたをこころぬをまの秋風はたはるすはたはる

花乃とてゆきしり守秋風は堅束はあといふる夕言

右方取有 其意仍乃勝

八

左

康光

花乃とてゆきしり守秋風は堅束はあといふる夕言

八ノ月廿二日

忘しやぬる手ありぬ月とてふかゝる月とて
大 勝 兵部内侍

神楽山月とてふりぬありしより尾上氏のあまの
大 勝

九史 大 勝 資隆

大 勝 龍基

ときれいなるきりぎりすの山風と後やとある秋の乃の
左 右 花宗

秋山よとてふやのあき嵐と乃此の晴れとてけり
乃乃の勝

廿一

左 勝

資隆

山風やとてふやのあき嵐と乃此の晴れとてけり

左

保李

山をたえけりしるのあき嵐と乃此の晴れとてけり

左 奇 勝 乃乃の勝

廿一

左 抄

康光

山をたえけりしるのあき嵐と乃此の晴れとてけり

左

家郷

山をたえけりしるのあき嵐と乃此の晴れとてけり

左 乃乃の勝

左 乃乃の勝

廿二

左

康光

山をたえけりしるのあき嵐と乃此の晴れとてけり

左

家郷

山をたえけりしるのあき嵐と乃此の晴れとてけり

左舟羽施の仍り時

北之妻

左 坊

資隆

此の所は最におもむきよらうと申す神をぬき

右

雅法

と申すもくもくをけきつて申すおとむり家持

右 坊

北之妻

左 坊

信實

此の所は最におもむきよらうと申す神をぬき

右

知家

此の所は最におもむきよらうと申す神をぬき

右 坊

北之妻

左 坊

行秋

此の所は最におもむきよらうと申す神をぬき

右

保孝

此の所は最におもむきよらうと申す神をぬき

左 坊

北之妻

右 坊

家直

此の所は最におもむきよらうと申す神をぬき

たのむ 泥基

くつらふもてつらふしつらふめをせむよさつらふ

たの下に七文字きつらふしつらふまたたつらふ

のつらふつらふつらふ

た七文字

左 坊 経高

つらふつらふつらふつらふつらふつらふ

た 泥宗

つらふつらふつらふつらふつらふつらふ

支首のつらふ

た七文字

左 勝 女房

たをたをたをたをたをたをたをたをたをたをたを

た 号内侍

つらふつらふつらふつらふつらふつらふ

左 公刻艶子

つらふつらふつらふつらふつらふつらふ

左 勝 女房

つらふつらふつらふつらふつらふつらふ

た 泥宗

つらふつらふつらふつらふつらふつらふ

たをたをたをたをたをたをたをたをたをたを

可謂秀逸なる勝

可安

左 坊

経高

香土のうらうらうとくさくさした昔のまほはげゆ

右

雅彦

ふさふさなぬたのせいのもくまのうらうら

右 坊

可安

左 坊

家宣

家のうらうらのはのうらうらふのうらうら

右

泥巻

家神は信サレるる女はひさしのうらうら

たまえうらうらのうらうらのうらうら

うらうらうらうらたまえうらうらのうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうら

可二馬

右

行徳

名丸川とサレつじ園のうらうらうらうら

右

号水内侍

香土のうらうらうらうらうらうら

たまえうらうらうらうらうらうら

可二馬

抄初巻
八巻末
乙亥
乙亥
乙亥
乙亥
乙亥

廿二左

信實

若くは就つるゝの成てそりくまてさねとてあはれ

太

家郷

川をなするうじむうーからぬありくこの世のい

支首雅子雅人 既由さる所の時

廿三左

太

資入隆

通くは成てふはうはるは最とる人の出さ也

太

保孝

肉をとる所のうらたきりしたるさるあはれ

支首不忌云々

とんちんかち行ん

廿四左

太

康光

物なきらりて反つゆりあはれこのハせくさるま

太

知家

あつ方浦よりとらはるぬは雅と原よりよの進

支首雅雅とゆら

廿六左 寄友恋

太

康光

恋恋あつたかすも今も了縁あつらひら

太

知家

るけし流ゆぬあはれよ月口くさる通流ゆあはれ

廿三左

信實

若くは既あるに於て之より更に其の功を

太

家郷

田川を了るるにむかうにあらぬありしを

支首雅子雅子雅人雅人故由より何の勝

廿四左

廿五左

資隆

逢ふに其の心はなほなほ其の心はなほ

太

保孝

肉をとりたるのりらに其の心はなほ

支首不忌云云

廿六左

太

康光

物なきをりて反りて肉を其の心はなほ

太

知家

あり方浦よりとらばなほ其の心はなほ

支首精雅精雅のり

廿六左

太

康光

流恋ありて其の心はなほ

太

知家

るに其の心はなほ

たるよとふたうらなみありしあもまいす
あしとせうめとふたはなとらうていも

廿七支

左

資隆

あはれつる愛ふむくひぬやまうらむとるも
とら

右

保孝

河川の上岡村とさうまきとらるるより
見まはる橋

右

廿八支

左

信實

とらうしとらうしゆはあしとらうしゆはあし
とらうしゆはあしとらうしゆはあし

廿九支

右

家郷

あしとらうしゆはあしとらうしゆはあし
とらうしゆはあしとらうしゆはあし

右

三十支

左

行旅

あしとらうしゆはあしとらうしゆはあし
とらうしゆはあしとらうしゆはあし

右

兵衛

あしとらうしゆはあしとらうしゆはあし
とらうしゆはあしとらうしゆはあし

右

三十一支

左

家直

あしとらうしゆはあしとらうしゆはあし
とらうしゆはあしとらうしゆはあし

い〜神とてりやうぬむのやうい〜とらうい〜まゝ其海
にた 大 範基

まけなく成り人代而乳人多きつ〜まゝい〜のい〜
大音不傳言仍たの勝

四十一支 左 右 後高

後た〜たありし〜と伝といの神ぬよは月の神とて
大 雅清

い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
大 右 左 後高

四十一支

左 勝

右 房

忘るる事なきい〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
大 範宗

後高とて逢原村境へつ〜まゝい〜のい〜のい〜のい〜
大 範宗

い〜支支音ひ帯く〜らたも能得神仍た勝

Handwritten text at the top of the page, possibly a header or title, written in a cursive hand.

花本

Handwritten text in the upper middle section, continuing the cursive script.

記

在

記

Main body of handwritten text in the lower middle section, consisting of several lines of cursive script.

記

記

110x
647
L1
8

